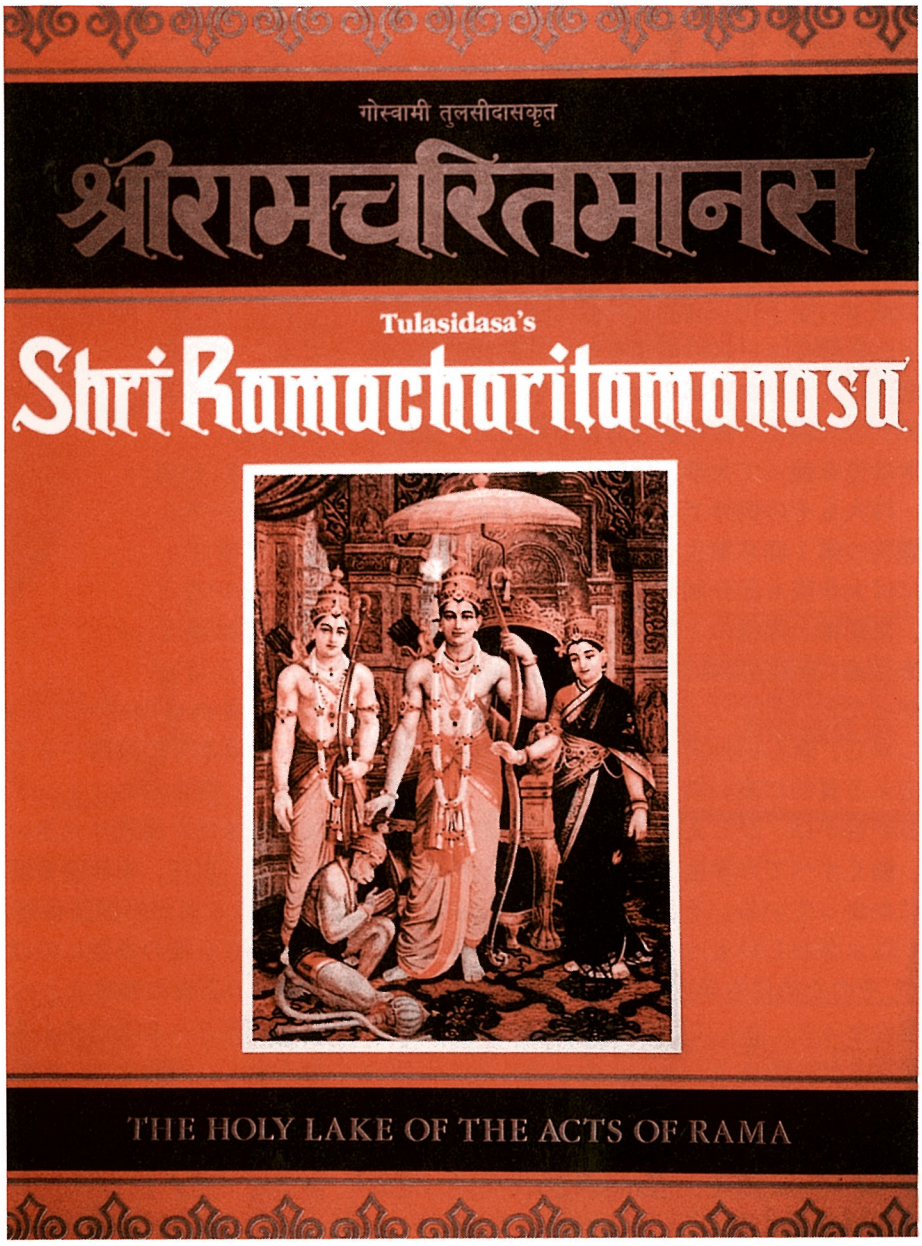
0-4-4

LIBRARY INFORMATION



目　　次

「苦悩の中」を歩む外大図書館……図書館長　岡本　武（2）

特集　情報検索コーナー

2階閲覧室に情報検索コーナーができました！　/　情報検索フロー
情報検索コーナー活用法　/　情報検索コーナーを活用しての情報検索のヒント

ヒンディー語文献の書誌情報及び画像データベースの作成プロジェクトについて……（3）
本学所蔵ペルシャ語図書目録について……（3）
寄贈図書の整理状況について……（3）
トゥルシーダース作『ラーム・チャトリ・マーナス』について……　教授　溝上富夫（4）

大阪外国語大学附属図書館　1998.7.10

第10号

「苦悩の中」を歩む外大図書館

附属図書館長　岡　本　　武

日本の大学は、１９９０年代に入って１８歳人口の減少、少子化・高齢化社会の到来、高学歴化と生涯学習のニーズの高まりなど、社会変化の影響をうけて大きな変革を迫られてきた。「大学設置基準」の大綱化・緩和がうちだされると、全国の大学は先を競って大学・学部の改革に取り組んだが、外大もその例外ではなかった。９８年春には新課程の第１回卒業生を世に送り出し、またこの年には大学院も区分制博士課程に発展的に改組され、後期博士課程の１期生を迎え入れた。２１世紀を目前に新生外大の制度的な枠組みがほぼ出来上がったといえよう。

しかし、新しい外大を新しい時代の社会的要請に応える質的に高い創造的な教育・研究の場にできるか否かは、ひとえに外大で学び、教育・研究し、働くすべての学生と教職員の自覚と努力の如何にかかっている。それは「新しい仏に魂を入れる」にふさわしいもっとも重要で難しい事業であるが、そのためにも学内の学術情報の集積と提供、伝達のセンターとして図書館の担う使命と役割は、今後計り知れず大きなものとなってくることはいうまでもない。

外大が上本町の狭いキャンパスから箕面の現在地に移転してすでに２０年近い歳月を迎え、この間に、学生数で１，５００人以上、教官数で１００人以上も増えた。学生や教職員の学術情報への利用者ニーズも急速に多様化・高度化し、それに対応すべく図書館職員の並々ならぬ努力もあって情報化時代にふさわしい図書館へと大きく変貌をとげてきた。とくに９０年代を迎えて、情報通信革命の荒波は大学図書館にも容赦なく襲い、各大学は新しい情報化テクノロジーの導入を急いだ。本学の図書館も８５年にコンピューターシステムを導入し、貸出・返却など閲覧システムと検索システムが稼働し、８７年に学術情報センターと接続、９５年からはＵＮＩＸマシンによる新しい図書館システムとなり、ネットワーク環境に適した分散処理型システムに移行した。さらに９７年にはバーコード方式の入・退館システムと図書自動貸出装置を導入し、学内ＬＡＮやインターネットシステムと結合して学術情報のインフラ整備に取り組んできた。

しかし、「いつでも、どこでも」学術情報に効率的にアクセスでき、利用者のニーズに対応できているか、というと現状では決してそうとはいえず、それに向けての基礎的な条件整備がはじまったばかりの段階であるといっても過言ではあるまい。図書館のファンダメンタルズの整備で今後に残された課題は大きい。

さて、現在、本学図書館の蔵書冊数は５６万冊（うち５５％が外国語書籍）を超え、所蔵雑誌も４，５００種の多数にのぼっており、収容可能冊数が４０万冊の書庫はとっくに満杯となっている。年間１万５～６千冊増える蔵書の収蔵スペースは全くなく、通路などに山積みにされている状態である。それだけでなく、学生数の増加で閲覧室の座席数の不足も深刻な問題となっており、図書館棟の増・改築は全学の知恵を絞って解決が求められている緊急の課題となっている。

情報化社会の大学図書館は「電子化」と「ネットワーク化」を推進し、学術情報への効率的なアクセス手段を保障することを第１の使命だとされており、外大図書館はこれまでかなりの努力をしてこの課題に応えて、遡及入力に取り組んできた。すでに検索サービスには約３１万冊が入力（５５％）され、学術情報センターへの登録もなされてきたが、まだまだ急がれるべき事業は多い。第１に、本学が誇る大型コレクション石浜文庫の整備事業は約４万点の書籍については完全冊子目録ができているが、まだ約４，０００点以上もの新聞、拓本、書簡類などが未整理のままであり、早急に補遺版の作成とデーターベース化を進める必要がある。第２に、特殊言語図書の遡及入力事業がある。翻字化を伴う特殊言語の入力は多大の経費と労力を必要とする事業であり、５カ年の特別計画

プロジェクトを作成し取り組んでいる。幸いにも約１３，０００冊の「ヒンディー語文献の書誌情報及び画像データーベース」の事業に、十分とはいえないが、今年度の文部省科学研究費の補助金がつき、古賀教授をはじめヒンディー語専攻の教官と院生の協力でプロジェクトが推進されようとしている。しかし、タイ語、ビルマ語などの膨大な数の文献資料が整理をまっているのが実状である。こうした遡及入力に必要なのは何よりも資金であり、苦しい財政事情の中とはいえ、この事業のもっている重要な意義に理解を深めていただき、学内でもそれ相応の予算的措置を継続的に採らなければ事業は一向に進まないことは明らかであろう。本学が誇る貴重な図書資料のデーターベース化を着実に前進させて、「いつでも、どこでも、どこからも」利用してもらえるように整備しておくことが図書館に関係する者みんなが第１の責務だと考えているのである。

情報化時代のどの大学図書館も、図書館が掲げる理念や使命と厳しい現実条件との矛盾の中で苦悩しており、図書資料の「コレクション」センターのイメージがつきまとうこれまでの「図書」館という名称と決別する質的な変化が求められているかのようである。「電子」図書館化が進み、大学図書館が「学術情報センター」に転身しつつあるこの過渡期に外大図書館は文字どおり「苦悩の中」を歩んでいるのである。

☆ヒンディー語文献の書誌情報及び画像データベースの作成プロジェクトについて

科学研究費によるプロジェクトとして昨年末に上記プロジェクトを申請をしましたところ、データベース作成補助金が今年度交付されることとなりました。これまで附属図書館が独自に行ってきた特殊言語の書誌データ作成プロジェクトの一つとして、５年前より推進してきたヒンディー語書誌データ作成を継承･発展させるものとなります。作成されている書誌データに画像データ（表紙及び目次情報）を付加し、書誌・画像データベースを構築します。

附属図書館では、インドの公用語であるヒンディー語資料を約１３，０００冊保有しており、本学ならではの、独自の発想によるデータベースを作成し、インターネットを介して内外に公開しようとするものです。

ヒンディー語専攻の古賀勝郎教授をはじめとする教官・大学院生の方々、本学卒業生・松木園久子（大阪大学大学院生）氏の協力を得て、プロジェクトを推進しているところです。

☆本学所蔵ペルシア語図書目録について

昨年来、本学大学院後期課程・竹原新（日本学術振興会特別研究員）氏の全面的な協力により、本学所蔵ペルシア語資料、約１，０００冊の書誌データ作成を行ってきました。

このペルシア語書誌データは、竹原氏による図書館システムへの翻字化入力がなされ、さらに竹原氏独自にMacintosh上ではペルシア語フォントによるデータ作成も行われています。

附属図書館ではその書誌データを有効利用するため、ＣＤ－ＲＯＭ化や独自データベースの公開に向け検討を行っております。

☆寄贈図書の整理状況について

和田規矩男氏より寄贈されたブラジル・ポルトガル語資料、約２，１００冊の内、約１，１２１冊の整理（特殊言語及び寄贈図書整理プロジェクト）が完了し、３階書庫に和田文庫として配架しています。ブラジルの政治・社会・歴史分野の資料を中核とするもので、内外の研究者・学生にとって非常に有益なものであり、利用が待たれます。残り約１，０００冊については、次のプロジェクトで行っていくこととなっています。

ミャンマー中央大学図書館からの寄贈資料、約８７１冊の整理も本学大学院生の協力で完了しています。

長見有人氏より寄贈されたハンガリー語資料、約６６０冊の整理も完了しています。

トゥルシーダース作『ラーム・チャリト・マーナス』について

地域文化学科教授　溝　上　富　夫

ヒンドゥー教に関する文献の中で、キリスト教の『聖書』やイスラーム教の『コラーン』に相当するものは何かと問われたら、『バガヴァド・ギーター』や『マヌ法典』等いろいろあって、これひとつとはいえない。これらは、サンスクリット語で書かれていて、一般大衆には読めない（もっとも、その大まかな内容については知られているが）。

二大叙事詩『ラーマーヤナ』と『マハーバーラタ』もサンスクリット語で書かれているが、前者はほとんどの近代インド諸語に翻案されていて、人口に膾炙している。また、インド国内だけでなく、広く東南アジア諸国にも伝わっていて、そこでの文化形成に大きく寄与していることもよく知られている。

ヒンディー語地域では、１６世紀の詩人、トゥルシーダースが東部ヒンディー語のアワディー方言で書いた『ラーム・チャリト・マーナス』（直訳すると、「ラームの行いの湖」という意味。）が人気があり、これが聖書に相当する、といっても過言ではなかろう。

このトゥルシーダースの『ラーム・チャリト・マーナス』は、おおまかなストーリーはサンスクリット語のオリジナルである、ヴァールミーキ作の『ラーマーヤナ』に依拠しながらも、いくつかの点で独自の解釈と詩作法もとりいれた。規模的に『ラーム・チャリト・マーナス』は古代叙事詩の半分以下となっており、内容的にも、ラームを完全に神格化している点が大きな特徴である。「ラーム・ラーム！」といえば、素朴な農民の挨拶であり、困ったときに「ああ、神様」という意味で、「ヘー・ラーム」という。この『ラーム・チャリト・マーナス』は全巻が朗詠される。また、毎年９月～１０月頃行われる、ラーマ（ラーマの現代的発音がラーム）が敵のラーヴァナを倒したことを祝うダシャヘラーという祭りで、ラーマの生涯を描いた野外劇（ラームリーラーと呼ばれる）が各地で盛大に演じられる。二年生の授業では、過去６年来、インドの国営TVで１年以上連続放映された大河ドラマ「ラーマーヤナ」のビデオを観賞している。１９９０年代になって、ヒンドゥー原理主義運動が急速な高まりを見せるなか、ラームの故郷とされるアヨーディヤーにラーム寺院を建立するという運動が、国内のイスラム教徒との対立を生み、この国おきまりの宗派対立→暴動を引き起こしたことは記憶に新しい。我々は、このような、神話と史実の混同に組みしたり、政治的煽動に翻弄されるのではなく、純粋に学問的に知識欲を満たすという目的でのみ、この『ラーム・チャリト・マーナス』を愛読すべきなのは、いうまでもない。【表紙写真解説】

◆編集後記◆

※２階閲覧室に情報検索コーナーが開設されました。今号では情報検索コーナーを特集していますので、利用者の皆さんがこの特集をヒントにして、大いに活用されることを期待しています。附属図書館では、より一層のデジタル情報の提供に積極的に取り組んでいきたいと思っています。

※新機能搭載の次期システムへのリプレースの検討も行っています。図書館システムの根幹に位置するデータベース整備が急がれます。

※そのため、特に特殊言語資料のデータベース入力に向けたプロジェクト計画を作成し、遡及入力を推進しています。今後とも、図書館業務に対するご理解とご協力をお願いします。

（専門員　岸本晴広）

大阪外国語大学附属図書館報《Library　Information》　第１０号

１９９８年７月１０日発行

発行　大阪外国語大学附属図書館　〒562-8558　大阪府箕面市粟生間谷東８-１-１

電話　０７２７-３０-５１１１（代表）